

蔵造りで有名な川越だけど、今回編集部が訪ねたのはハイカラでモダンな洋風の建物。

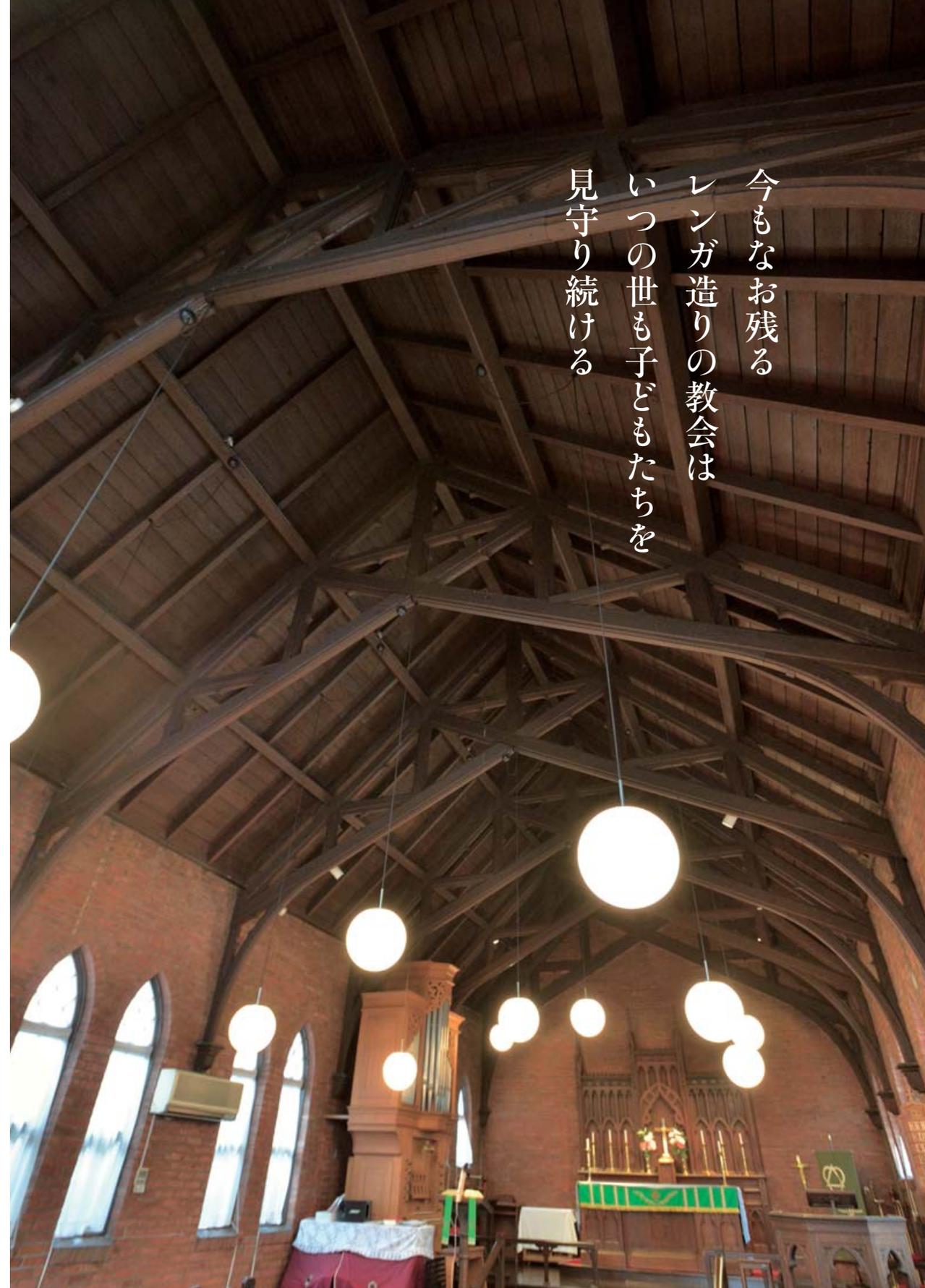
大正から昭和初期にかけて建てられた建築物が、今も現役で町のひとたちに活用されているのです。

ずっとその場所で川越の変遷を見てきた建物とそこに住まい、生活を営むひとびとに川越への思いを伺いました。

文 = 井上幸 櫻井理恵 写真 = 須賀昭夫 SPAIS
協力 = 川越市立博物館 共和木材 建築設計室 守山登建築研究所

洋風建築が 語る 川越のこと

今もなお残る
レンガ造りの教会は
いつの世も子どもたちを
見守り続ける



ハンマービーム工法の小屋組の屋根

急勾配の屋根と尖塔アーチ型の窓、時を経たレンガの色が特徴的な川越キリスト教会の礼拝堂。川越における幼児教育は、この教会が中心となっていたといっても過言ではないだろう。明治時代に海外からやってきた女性宣教師が、この地に梅壇幼稚園（現在の初雁幼稚園）をひらいたことが始まり。最初の礼拝堂は明治二十六年の大火で消失してしまったが、大正十年には現在の価格に換算すると約一億五千万円もの費用をかけて、現在の礼拝堂が建設された。設計者は立教大学の実施設計者ウィリアム・ウィルソン。

日本聖公会 川越キリスト教会礼拝堂

川越市松江町 2-4-13
049-222-1429
<http://www.kawagoe-seikoukai.org>

赤レンガを使用し、中世ゴシック建築を思わせる重厚なデザインとなっている。このように一〇〇年以上の歴史があると、代々初雁幼稚園を卒園し、小学校にあがってからも日曜学校などでキリスト教の教義に触れるひとも多く、かくいう私も親子三代でお世話になっている。

現在も川越に住むひとびとの心のよりどころとして、大切に使用されているこの教会で「子どもたちを、これからもずっと見守っていきたい」と奥石勇司祭。取材中、凛とした空間に優しい光が差し込んでいた。

- a. 建設当時から今でも大切に使用されている洗礼盤
- b. パイプオルガンの荘厳な響きに、心を揺さぶられる
- c. 昭和30年代の初雁幼稚園の園児たち



礼拝に訪れた初雁幼稚園の園児と先生、司祭の奥石勇先生



a.



b.



c.



一瞬にして、
タイムトリップ
和洋折衷が織りなす
粋を感じて



二階の廊下。当時の面影を残したまま改修された

細い小路を入ったところに佇む、レトロな洋館。昭和四年の竣工から、ほとんど形を変えずに川越の歴史を見てきたモダン亭 太陽軒の建物は、国の有形文化財として登録されている。川越市内に洋風建築は多く現存しているが、太陽軒は比較的規模が大きく、外壁の色漆喰塗りや、建物のいたるところに見られるアーチなど、随所に独特の意匠が施されている建物だ。

大正十一年から西洋料理店を営んでいた太陽軒。昭和初期に現在の形になってからも、川越の名士たちが足繁く訪れ、西洋料理を楽しんでいたという。現在でもその伝統的なレシビは受け継がれ、大正・昭和を彷彿とさせる一階のレストランや、二階の三間続きのお座敷で味わえる。

二階には、「当時で家が一軒建つほどの費用」をかけて作られた和室もあり、現在でもその凝った造りを間近でみる事ができる。また、当時川越まつりの際には、太陽軒で食事を楽しむ名士たちに向かって、表通りで山車が停止

してお囃子を披露したという。名士たちがその山車を眺めた小窓が現存するなど、古き良き時代の粋を今でも感じる事ができる。

平成十五年、オーナーの樋口夫妻は当時の面影をなくす



アーチ形の入口をあえて建物の角に設けた設計。昭和を代表する建築意匠だ

モダン亭 太陽軒

川越市元町 1-1-23
049-222-0259
<http://www.kawagoe.com/>



ことなく改修をおこなった。新しい時代のスタイルも良いけれど、古いものを受け継ぎ、大切に作る心が垣間見える。川越に歴史的な建築物や文化が多く残されている理由が、少しわかったような気がした。



料理は和テイストの西洋会席がおすすめ（詳細はP28）

- a. 2階の大広間。奥の床の間もそのまま使用されている
- b. 当時、かなりの費用をかけて作られた和室。繊細な細工に思わず息をのむ
- c. 川越まつりでは、通り向こうに停まる山車を眺めたという小窓



c. b. a.

三連のアーチ型の窓が特徴的な外観



大正浪漫を
体現する
洗練された
建築物の美しさ

問仁田家（シマノコーヒー大正館）は、昭和八年に建てられた。洋風の付け柱に仕切られた三連のアーチ型の窓が特徴的で、もともと呉服店として建てられたものを、島野晃さんが借り受けて、現在は喫茶店として営業している。建物の一階前面部分や内装は店舗用に改装したが、二階部分は当時のまま。軒やひさしも手の込んだデザインで、まさに近代日本を彷彿とさせる造りになっている。

問仁田家 -シマノコーヒー大正館-

川越市連雀町 13-7 (大正浪漫夢通り)
049-225-7680
<http://www.koedo.com/taisyoukan/>



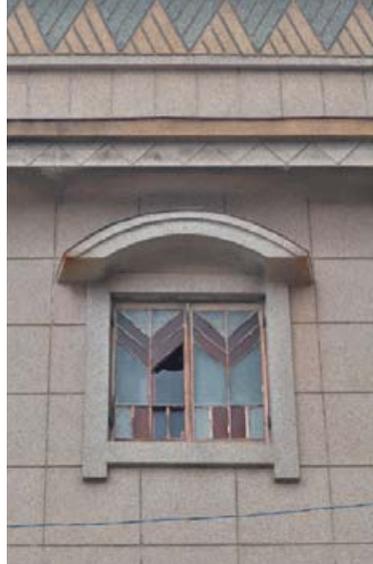
改修時につけた扉も大正モダンを感じさせる

ツチラベルのコレクション、柱時計も一役買って、大正浪漫通りにふさわしいレトロな雰囲気を出している。大正浪漫夢通りは、平成になって銀座商店街から改名。その後、昭和三十年からあるアーケードを取り外し、電柱を地中に埋めて現在に至る。専門店が軒を連ねるこの通りは、和洋を問わず古くからの建物が現存しており、今でも店舗や住宅として使われている。この商店街のみならず川越に多く残る昔ながらの町並みは、本物だからこそ価値があり、訪れるひとびとを惹きつけて止まないのだろう。

- a. マスターの島野晃さん。近隣の懐かしい話をたくさん伺った
- b. 外の柱には呉服店時代からの銅板が取り付けられている
- c. d. ペンダントライトと蛍光灯のシェードは、以前から使われていたものを使用している



d. c. b. a.



片山家

住所非公開
※住宅への訪問・敷地内への立ち入りはお控えください



襖の引き手には月と稲。
農機具の会社ならではのデザインか

a. b. c. 屋内ではいたるところに大正・昭和の時代が感じられる

d. 昭和初期に流行した天井のレリーフ。幾度も塗り替えている

e. f. 特徴的な外観が目をはく



d.



a.



e.



b.



f.



c.



その存在感に圧倒
川越における
昭和の名建築が
静かに佇む街角

片山製作所は、大正時代に川越の江戸町（現・大手町）に創業した農機具の製造・販売のメーカーである。製縄機や藁打機、耕転機など、今では農業に欠かせない農機具を次々に開発し、日本各地に販売している。

川越市内のある閑静な場所に佇むこの特徴的な洋風住宅は、昭和八年の建築。片山製作所の副社長を務めた御仁とその家族が現在も住んでいる。外壁は人造石洗い出し仕上げで、太い円柱や窓枠のデザイン、壁の幾何学模様など、凝った造りになっている。今回取材で屋内にあらわせていたのだが、建設当時より改装はほぼ行われておらず、今も大切に使われていた。

元副社長の奥様が昭和二十四年に片山家にお嫁にきたときは、住み込みのお手伝いさん用の部屋もあったといい、まさに大豪邸といえる造り。庭には他に類を見ないほどの大きな五葉松も枝を伸ばしている。ここで奥様は工場で働く従業員のために炊き出しをしたり、家族皆で昭和の時代を駆け抜けた。「ただ古いだけなんですけどね…」ともう何度も塗り替えているという洋間の天井を見上げる奥様。ずっと変わらずに家族を見守り続ける、建物の息吹を感じたような気がした。



二階は湯宮さんが使っていた形をできるだけ残して改装した。2部屋あった和室の1つは板張りに

- a. b. 建具の金具も当時のまま。傷みもあって壊れてしまう恐れもあるので、開閉はできるだけ避けている
- c. 建物の横に残されたつり具の看板。青緑色の外壁とともに歴史の長さを感じる

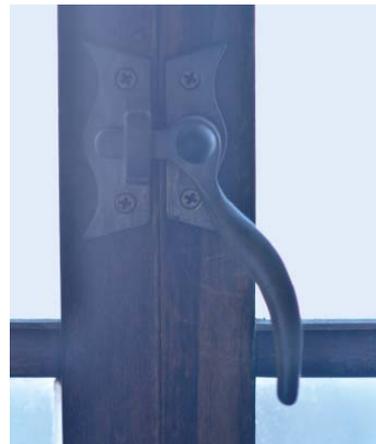
手打そば 百丈

川越市元町 1-1-15
049-226-2616
<http://www.100-jo.jp/index.html>

ご主人と「手打ちそば 百丈」を営む鈴木千世さんは十八年前、趣あるこの建物に出会った。先代である両親と開店の店舗探しをしていたところ、当時「湯宮釣具店」であったここが売りに出されたのだ。気に入ったが購入は難しいと思っていると、伝統的な建物に価値を見出していた方が買い取り、大家さんになってくれた。

建物は今では珍しい銅板の壁面化粧張り建築。看板建築とも呼ばれ、正面だけを洋風に装飾した構造は、大正末期から昭和初期に商店建築の新しいスタイルとして流行した。ここは昭和五年に釣具店の店舗兼住居として建てられた。「銅板だから、今は錆びてこんな色をしているけれど、建てたばかりは新しい十円玉のようにピカピカだったんだよ」と当時を語る湯宮さんの話を聞き、さぞかしこの建物がご自慢であったのだろうと感じた。

「湯宮さんがここを建て、ご家族を養われたことはすごいことですし、商いをする心意気がこもった建物だと思うのです。思い出も詰まった場所ですので、その想いを引き継いでいきたいです」。年月を重ねた建物には傷みも見られ、台風がきたり、雪が降ったりすると心配が多い。しかし、鈴木さんは今ここで商売ができることをとても幸せに感じているという。



a.



b.



c.



力強さを感じる
壁面の意匠
腕のよい職人が残した
珍しい看板建築

一階は改装されたものの、建てられた当時の外観を今も保っている



a.
b.
c.

- a. 建具や金具は当時のものをできるだけそのまま残している。新しいものは古いものと同じデザインで作り直した
- b. 診察室の格子戸は当時のもの。格子が斜めになっている珍しいデザイン
- c. 二階へと続く階段は建てられたときのまま。板の足が触れる部分だけ色が変化している

中成堂歯科医院

川越市幸町 13-5
049-222-0035
<http://www.chuseido.com>



友達と遊んだ思い出や、何回も塗り替えている壁と屋根の色の記憶が、今でも鮮明に残る



中野清先生が開業されていた当時の写真。治療室の雰囲気は今とよく似ている

外壁はイギリス下見板張り。屋根の石板の葺きかえは東京駅の屋根の修理をした職人をお願いした



この先も、町の
歯医者さんとして
川越の町とともに
歩み続けたい

れる心があつたと思うのです。もともと歯科医院として建てられたのですから、やっぱり歯科医院であり続けることが建物にとっては幸せなのかな。先生はこの先もどのような形であれ、建物を大切に使い続けたいと考えている。

清先生が亡くなつてしばらくは子供部屋となり、建物は歯科医院としての務めを離れる時期が続いた。しかし、平成十四年から再び歯科医院としての時を刻み始める。「西洋の医療技術を取得し、治療に当たった者だからこそ、当時から西洋的な建築を受け入

れ。清先生が亡くなつてしばらくは子供部屋となり、建物は歯科医院としての務めを離れる時期が続いた。しかし、平成十四年から再び歯科医院としての時を刻み始める。「西洋の医療技術を取得し、治療に当たった者だからこそ、当時から西洋的な建築を受け入



昭和5年にかけられた棟札



一番街の喧騒がふと途切れ、郷愁の念に駆られる

一番街を通るたびに、思っていた。「この建物はいつたいなんだらう？」少し奥まったところにひっそりと佇む洋風長屋に、ノスタルジックな小路。そして平成二十五年、一番手前の洋品店が復原され、昭和五年の建築当時に近い姿が甦った。

松ヶ角家は、五軒長屋の東端の一棟を所有。以前の所有者により外観などが改修されていたが、平成二十四年から建設当時の資料を基に復原が行われた。以前の松ヶ角家全体を記録した資料は少なく、古写真や当時の建物を知っている住民に色や造作を聞きながらの作業となったそうだ。モダンなデザインのファサ

松ヶ角家

川越市幸町 1-12
※2階は見学不可
鍛冶小町堂 (1階)
049-223-7077

1ドを持つ建物は、現在一階に雑貨店（鍛冶小町堂）、二階は松ヶ角絃一氏（有限会社川越ホーム）の会議室として使用している。元の骨組みやデザインを生かした、開放的で暖かな雰囲気。天井の柱には当時の棟札をみるこができる。

「建物が長く引き継がれていくのも、後継者がいればこそ。川越の地のすばらしい建築物が新しい形で甦っていくことを願っています」。現在、川越で多くの不動産物件を扱う有限会社川越ホーム。以前からこの一角に惹かれていたという。多くのすばらしい縁を経て、今、松ヶ角氏はこの場所に座る。



川越の町が大好きだという松ヶ角氏

a. ひっそり佇む五軒長屋。現在は店舗としても使用されている

b. 復原前の建物。建設当時の面影はない



b.



a.



一番街のかわいい小路
今、蘇る
ノスタルジックな
長屋の一角を訪ねて

蔵の町にじっくりくる、モダンなデザインのファサード



旧田中家住宅。大正四年建築、川越市指定有形文化財

アートカフェエレバート
川越市仲町六丁目
〇四九二二〇二四一
一一時～一八時（LO十七時半）
水曜定休
取材協力

対談

洋風建築と川越

—歴史的建造物からみる町づくり—

守山登 × 馬場崇

守山登建築研究所

共和木材 建築設計室

和洋問わず古くからの建物が多く残されている川越。その建物の修復に携わっている川越出身の建築士、守山登氏と馬場崇氏に、未来へ向かう川越の町づくりについて伺いました。インタビューを行ったのは、一番街のアートカフェ エレバート。もともと蔵を建てるつもりが、途中で看板建築に変更されたのだとか。銃砲店だった頃、試し撃ちで使用されていた庭の壁なども残っています。

文=櫻井理恵 写真=須賀昭夫

「もしかすると、まったく違う川越になっていたかもしれませんね」

— 本日はよろしくお願ひします。さっそくですが、お二人は川越市内でどのような建造物を修復されてきたのですか？

守山 僕は比較的、洋風建築の修復が多いかな。馬場さんは和風の建築物の修復のほうが多い？

馬場 そうですね、洋風建築の改修などを請け負うこともありますが。

— 川越って、歩いているとあたりまえのように古そうな建物をみかけますが、修復の依頼は個人からくるのでしょうか。

馬場 ほとんどの場合が、持ち主の方から依頼されて修復します。

守山 こちらで調査して、「この建物は価値があるので、保存しませんか」ということもあります。川越は比較的、古い建物が多く残っているほうだと思いますね。

馬場 お店にしたりせず、個人的に使用している人も多いですね。

守山 残した、というよりも、残ってしまった、ともいえるかもしれませんね。

— 残ってしまった、とは？

守山 今はこのような古い建築物が観光に対しても大きな役割を果たしていますが、以前は建物の価値を知って残しておく、というよりも、川越の人はずっとあるものを当たり前のように生活の中で使っていたのでしょ。

馬場 蔵造りの通りも、時代の流れでベッドタウンとして開発の対象になっていけば、古い建物は壊れてしまっただけで、マンションや集合住宅になっていたかもしれないですね。

守山 うん、そうすると、今とはまったく違う川越になっていたでしょうし。まだ手をいれていない、保存というよりも日常的に使っているという状態から、「江戸時代からの蔵が残っているぞ」ということで、観光地になっていったというわけで。

— 川越の昨今の発展状況からみると、古い建造物を修復して残しておくことは、観光に対しても大きな役割を果たしているように思います。

守山 そうですね、修復した建物を店舗として活用するところは多いです。その建物の価値や活用方法を見

出せずにどんどん壊してしまう町もありますから。

馬場 ずっと前からあるので、実際に生活している人にとってあたりまえの風景になっているのかもしれない。価値のある建造物で日常生活を送れるなんて、すごく恵まれている環境ですね。

— 歴史的建造物の保存については、行政からの依頼もあるのですか？

守山 重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）を設定して、市役所の方で調査しています。僕たちはその実測調査にかかわっていて、その後の管理は民間で行っています。

馬場 実測調査や修復にかかわると、当時の流行や工法にびっくりしたり、感動したり。大変ですけど、とても興味深い作業なんですよね。

— 川越の洋風建築の特徴というと、どんなものがあるのでしょうか。

守山 洋風建築にも、種類があります。例えば埼玉りそな銀行（一番街）、川越商工会議所（大正浪漫夢通り）、山吉ビル（現・保刈歯科醫院）などは、当時の建築家が設計し、建てられました。一方、看板建築や洋風町屋といわれる建物は、大工さんがそういう建物の設計した建物を、見よう見まねで建てているものもあります。

馬場 都内で建築中の洋風建築を施主や棟梁が見に行くと、「こういう風にした」とか相談しながら。だから、中の骨組みは和風の建造物のものだけど、外観は洋風にしています。これを擬洋風建築といいます。昔の大工さんは、本当にすごいですよ。今見ても、ちゃんと造られているんです。

— 看板建築や洋風町屋などは、いつ頃から建てられ始めたのでしょうか。

守山 看板建築は大正から昭和初期に流行しています。関東大震災の後になると、崩れた土蔵のところだけ洋風にした看板建築などもあります。馬場 川越でも、昭和三十年代くら



カフェ エレバートの2階部分。蔵を建てる予定が途中で看板建築に変更。骨組みは蔵造りと同じになっている



守山 登 Noboru Moriyama

1971年川越市生まれ。1994年日本大学理工学部建築学科卒業。石井和紘建築研究所、小松清路建築研究所を経て、1999年守山登建築研究所設立。川越のまちづくりにかかわりつつ歴史的建造物などの復原などを行っている。NPO法人川越蔵の会副会長兼広報部長、東洋大学非常勤講師。

いにはまだたくさん残っていたと思いますよ。

——古い建造物を修復する場合、当時の建築材料や設計図などまだ手に入るものですか？

馬場 昔の洋風の建物は、西洋の石造りを真似て、モルタルの中に石を混ぜて色を出す「人造石洗い出し」という工法を使っています。

守山さん、よくその石の産地がどこだったか、ということ苦労して調べてるよね。

守山 そう(笑)

馬場 それに、設計図どころか写真も残されていないことがあるので、あとは当時を覚えている人に色や造

作を聞いてまわったり。

守山 山吉ビルの修復時は、建設当時の資料が少なかった。建築した保岡勝也の図面を参考にしたけれど、その図面とそこに住んでいたおばあちゃんの証言が少し違っていて。

——そんなこともあるんですね！設計どおりではなかったということですか？

馬場 まあ、途中で変更したんだと思いますけど。

守山 結局はおばあちゃんの証言が正しかったという(笑)

馬場 修復のときは、本当に写真が大事ですし、実際に住んでいる人の話もとても参考になります。

「設計図より、おばあちゃんの証言のほうが正しかったんです(笑)」

けてみたり。使っている人の使い勝手

手です。なんですかね。できた当初が一番よい、とは限らないわけで。商家だったら、商売の種類が変わると同時に建物の形態が変わるのは不思議ではないですよ。

馬場 だからって、何でも簡単に変えちゃえばいいってわけでもないんですが(笑)。

守山 今はインターネットでなんでもすぐに情報が検索できますよね。例えば、川越には今までなかった文化を持ってきた、という話もあるんです。京都の犬矢来を置いてみたらどうか、とかね。

馬場 もしかすると、それを置くことで、後年に新しい文化の形として根付く可能性もあると思うんだけど、よく考えないといけないのは「それが本当にこの土地に必要か？」とい



馬場 崇 Takashi Baba

1973年川越市生まれ。千葉大学工学部建築学科卒業。宮脇建築研究室勤務を経て、家業の共和木材を継ぎながら建築設計活動を行う。一級建築士。東洋大学非常勤講師。NPO法人川越蔵の会デザイン部長。

うこと。

守山 現代の生活に合わせる必要があるけれど、違う土地の文化を取り入れることで良くなるかどうか、という問題もあります。

馬場 昔は遠くに行くのも一苦労で、なかなか他の土地を見に行くこともままならなかったから、建物もその土地に合った工夫がされてきたけど、今は本当に様々な文化が簡単に検索できて、イメージだけ先行してしま

守山 そうそう。例えば川越は白漆喰か黒漆喰の土蔵が主だけど、なぜ岡山の名まこ壁ではないのか、とかね。

——修復作業のときの苦労はありますか？

馬場 例えば復元するとき、「こういう風に造ってね」というと、いろいろとできないこともあるんです

——いまや川越のランドマークとも

いえる埼玉りそな銀行や川越商工会議所のように、企業や団体が使用している建物も、当時のままなのではないか。

馬場 増築はしていますね。

——あれだけ価値ある建物だから、岩崎邸のように見学用に保存されたりしそうなものですが…。

馬場 実際にずっと使い続けていますしね。商工会議所も、過去には銀行が入っていたこともあります。

守山 それなりに価値のあるところをずっと会社として使い続けているんですね。

馬場 素材も石造りを真似した洗い出しだけど、もともとの材料がいいから年月を経ている味ができますしね。

——やっぱり、当時こんな洋風建築は、建設に費用がかかったでしょう。

「住んでいる人や商売が変わることで、建物自体も変わっていくのは、不思議なことではないんです」

守山 お金持ちじゃないと建てられないんじゃないかな。

馬場 そうですね。蔵造りも含めて、やっぱりそれなりに財産のある人が建てたと思いますよ。

守山 川越は舟運などで栄えて財力のある人が多く、建物にも時代の最先端を取り入れられる人が多かったのは事実。大正から昭和にかけて、今度は流行の洋風建築になるとかね。その後も少し産業が後退してしま

った時代に、今度は何もしまないまま古い建造物が残ることになって。

馬場 もし、江戸時代からそのまま繁栄し続けていたら、もつと違う町になっていったんじゃないかな。

守山 建物に時代や状況の変化でいろいろなことが起こってくるんです。

——例えば入り口を変えてみたり、蔵に洋風のショーウィンドウを取り付

「当時の建築技術や住んでいた人の心に触れるのが楽しい」

よ。できない理由は、予算の問題、技術の問題、工期の問題とか。

馬場 今だと、職人さんが昔の工法を知らないということもある。

守山 まあ、でも一番多いのは予算の問題かな。手間もかかるし、人件費も昔より高くなっているし。

馬場 当初予算では厳しいなあ、ということがあります。お金も時間もかかることなので、その兼ね合いをどうするか、いつも悩むところですね。

守山 お金のかかる方法とお金のかからない方法は、表面上ではあまりわからないんです。どこまでこだわって復元するか、という問題。

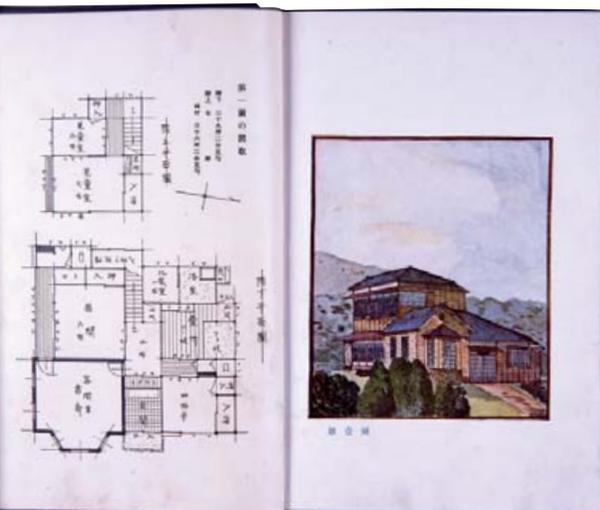
馬場 一世紀近く昔のものを再現したりするわけだから、他にもたくさん苦労することはありますが、当時の建築技術や住んでいた人の心に触れることはとても楽しいですよ。

——最後に、お二人にとって川越とはどんな場所ですか？

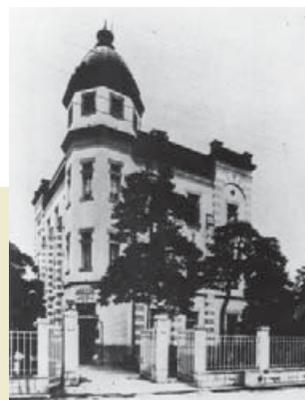
馬場 いつも思うのは、川越の人って川越が大好きですよ。実は子ども



カフェ エレバートが銃砲店だった時代に、試し撃ちに使われていた壁。今も銃弾の跡が残る



『欧米化した日本小住宅』は大正6年以降に保岡が設計した住宅作品32点の外観・間取りが掲載されている



ルネサンス様式の建物は、今も川越のシンボリックな存在となっている



川越に多く残る歴史的な建築。一〇〇年近くも前の建物を、いま私たちが見学したり利用したりできるのは、当時に比べてはるかに発展した建築技術だけではなく、復原にかかわる建築士や建設会社の多大な努力によるものです。大火や戦火で消失してしまったと思われる資料をどうにか探し出したり、古くから近隣に住むひとに聞き込みをしたり…。そんな気の遠くなる調査を経て、昔の建物が息を吹き返すのです。今回は、昭和五年に建築された幸町に残る洋風長屋の一角、松ヶ角家（※詳細はP16参照）の復原にかかわった守山登建築研究所の守山登氏に協力を仰ぎ、復原作業の一部をご紹介します。

松ヶ角家の復原現場をのぞいてみよう

骨組みから読み解く、当時の窓の位置

写真があれば話は早い。しかし、その大事な写真がほとんどない場合どうしたらいいのでしょうか。松ヶ角家では、以前の所有者が商売にあわせて外観を改築していました。そこで、元の柱をよく見てみると、改築時に取り外されてしまった窓枠の跡が確認できます。そういった痕跡や数少ない写真から、窓の大きさを割り出して、当時の姿に近づけるのです。



2階南側中央の柱には、蝶番や窓の木枠の跡が残っており、窓が取り付けられていたことがわかる

すてきなアーチの作り方

五軒長屋の特徴のひとつは、モダンなファサード。その愛らしいデザインは「人造石洗い出し仕上げ」と「人造石掻き落とし仕上げ」によって再現されました。これらの工法は、種石をいれたモルタルを水を流しながらブラシで洗ったり掻き落とししたりして、種石を見せる左官仕上げのこと。下地は木で造られ、さらに左官彫刻も張られました。



木で作られた下地



「人造石洗い出し仕上げ」を施しているファサードの一部



表面をブラシで掻き落とし、「人造石掻き落とし仕上げ」の作業



竹を細かく割って束ねたササラで掃きつけるドイツ壁

他にも松ヶ角家には、大正時代に流行したモルタルの掃きつけによって凹凸の風合いを出す、「ドイツ壁」（掃き付け仕上げ）などが見られ、大変面白い深い建築物となっています。

現在では施工することもほとんどない工法がたくさん使われている松ヶ角家。少しでも立ち止まって、西洋に憧れていた時代の川越に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



公開に関する情報は川越市HPをご覧ください

川越に建つ旧第八十五銀行（現埼玉りそな銀行川越支店）、旧山吉デパート（現保刈歯科醫院）、旧山崎家別邸。これらの設計者が明治・昭和に渡り活躍した建築家・保岡勝也である。

明治一〇年（一八七七）に東京に生まれた保岡は、東京帝国大学工科大学建築学科（現東京大学工学部）に入学すると辰野金吾に師事し、大学卒業後は三菱合資会社へと入社する。そこで辰野金吾の同期で三菱合資会社丸の内建築所の所長、曾禰達蔵のもと丸の内ビルディング街の構築に取り組んだ。国内二例目となる鉄筋コンクリート造の第十四号館は関東大震災以降に広がる鉄筋コンクリート建築の先駆けともいえる建造物となった。

大正元年（一九一三）に三菱を退社し、翌年に事務所を開くと経験や人脈を活かして地方銀行を始めとする商業建築に携わる。そして大正四年（一九一五）には、彼の設計で川越貯蓄銀行が建てられた。保岡の活躍を知っていた山崎嘉七は、当時副頭取をしていた第八十五銀行の設計を依頼。大正七年（一九一八）にルネサンス様式の洋風建築、第八十五銀行本店が完成することとなる。さらに昭和十一年（一九三六）には四本のイオニア式の円柱が象徴的な山吉デパートが第八十五銀行の通りの反対側に建てられた。

保岡は中小住宅も手がけた。三菱にいた頃から余暇に住宅を設計

商業建築と中小住宅

ふたつの分野で活躍した建築家・保岡勝也

参考『建築家保岡勝也の軌跡と川越』（川越市立博物館編集）

し、『新築竣工家屋類纂』や『理想の住宅』など十七冊もの著書や出版。住宅の設備や室内・家具装飾などについても記している。大正十三年（一九二四）に手がけた旧山崎家別邸は洋館と数寄屋造りの和館が複合し、和洋の建築知識を持つ保岡の住宅における集大成ともいえる。ここで保岡は茶室や庭園も設計しており、現在建物は川越市の指定文化財、庭は国の登録記念物に指定されている。